私の学生時代

いもねぎの味

下村泰介

深い霧の遠い彼方の話しではあるが、学生のころの思い出というものは不可思議に生き生きしているものである。

去年の秋、欧州へ旅立つ前に、松山教授を見舞っての帰り道、相国寺の松林を通りぬけて久方ぶりに同志社の門をくぐった。

私の中学時代の建物というものはほとんどが赤練瓦建てのもので彰栄館、チャペル、理科学館、神学館ぐらいのものであったが、今は思い出の立木も少なく都会のビルの谷間といった感に打たれたのは私のみであろうか。

中学時代に何といっても思い出すのは英語の時間の多かったことである。国語や漢文はさておいて理学、数学、西洋史まで英語であり、アメリカ人の教師も数多く遮二無二英語が身についたものである。その内でも三角も英語でやらされたのには今もって夢にみるほど悩まされたもので、泰先生の面影はなお消えることなく生きつづけている。

その時分の教師は学を教えるとともにいま流行語となっている人つくりには身をもって人生に処する道を示した立派な人が多かった

波多野先生というのは一年中和服に袴姿でまことに立派な人格者で、今もその温容が浮んでくる。洋服のズボンがはけないという理由について学生間にはもつぱら定説があり、ユーモアに豊んだ野次がよく飛んで、先生におしかりを受けたものも相当あった。

理科学館の標本室に門外不出の珍品が有って相沢先生が秘蔵しておられた。両性猿の剝製標本であって学生が面白半分に標本に近づくとあわてて持っている本で局部をかくされるのが常であった。私が若いころ生物学に興味を持つようになったのも、この先生に個人的なつながりを持つようになったためであろうと思う。一生涯ばらと一緒に過してきたのも、また老後のため室内の園芸ということで洋蘭を始めかけているのも先生のお蔭であると喜んでいる。

この理科学館に教室を持っておられた化学の福井先生という方もなかなかユーモアのある先生であるが、試験は可成りきびしく学生間では苦手の一人であったように記憶する。苦手といえば何といっても代数を担当された先生で本名を忘れるほどニックネームのジゴマで通っていた。そのころ同志社中学にはエックスキユーズという制度があって、平常点が八十点以上ある者は期末試験前に学科名と氏名が貼りだされて試験地獄から無罪放免ということになった。

このエックスキユーズは当時の中学生にとっては鬼の首をとったほど嬉しく、私がスキーに熱中できたのも課目の半分ほどこの恩典に浴しえたからであった。

スキーといえば今もご健在の前窪先生とのスキー行には数々の思

い出が残っている。相棒は早稲田の理工をやって若くして他界した親友の塚本君であった。関温泉がわれわれスキー部の宿場になったのは予科に入ってからで、それまではほとんど伊吹へでかけた。

英語では口八丁手八丁の先生もスキーには思うように行かず、ある日ひどく捻挫されて塚本と二人で麓の宿舎に担込んだ上、大雪の夜道を上新庄まで薬を買いに行ったことが昨日のように思われるほど忘れがたい。

同志社は日曜日の礼拝のあったためか土曜日は半どんでなく全休であった。

塚本と比叡山登りを始めたのもこのためで三年の頃からほとんど土曜日には赤山から登って白川を下ってきた。ちょうど五〇回の比叡山登りが終った頃、三山参りというものを始めた。土曜日の早朝比叡へ登り八瀬の方に降りて鞍馬に詣で西山づたいに愛宕に登るのである。この頃には歩きながら辞書を暗記したのは大分進んでいた。歩くことには自信を持つようになってはいたものの、嵐山から道の遠いのにはまったく閉口して、どちらからいうとはなしに電車に乗って仕舞ったことも度々あった。

二十七貫の体重となった今では三山はおろか一山もケーブルにたよる外はないが、この京の山々を見る度に親友塚本を想わざるを得ない。

先年まで同志社就職課で学生の世話に懸命の努力を続けていただき、今はまた記念事業のため奔走しておられる小野義夫君とは、小野君の何年目かの年に学級を同じくし同君との思い出も誠に多彩である。おそらく中学で小野君ほど多くの同窓を持たれた人もまれであろうと思う。

彼の郷里近江八幡へ夏休みに同行して近江ミッションのガリラヤ丸で清遊したのは中学の卒業前の年であったと思う。そのつぎ郷里では確か中学生の彼が角帽をかぶっていたように思われるが彼の人柄のよさのせいか、誰も気にするものはなかった。そのときご馳走になったギギという魚の味が忘れがたく、小野君に先日所望したところ、そのシュンの七月頃には必ずとどけて下さるとのこと今から大いに期待している。

あの頃食堂では学校の近くに中井というのと香川というミルクホール兼軽食食堂があり大いに厄介になったものである。

かなり贅沢だと噂されていた中学生も毎日肉食もならず、専ら「いもねぎ」という料理で我慢していたものである。馬鈴薯のスライスしたものと玉葱を油いためしたもので中味が浮くほどソースをかけて白飯と食べるのであるが、若干余裕があればこれに牛肉のミンチを加えたもの、これを通称いもねぎパラパラといった。

同志社中学は私の前後十一年になる同志社生活の内でもっともなつかしく、また同志社という雰囲気にもっともよく浸ることができたところであった。

私は今生涯を省みてもっとも誇り得るものは同志社で遊びかつ学び得たということである。

私は同志社の学生諸君が、私と同じような誇りを持ち得るように同志社のうるおいのある生活を続けられるように祈って止まないものである。

（大八・中、大一五・大法卒、綿花経済研究所長）